

THE BRIGHTER

...

...

...

巻頭言

クリントンとフルブライト

岩野 一郎

アメリカに「変化」をアピールしたクリントン政権が誕生し、日本でも自民党が過半数を割るという「変化」が起きました。同じ「変化」といっても、その質は大きく違います。日米の間でお互いの「変化」を読み誤ると、相互にとって最も重要な二国間関係に歪みが生じかねません。このような歪みを生じさせないようにするためにも、「国際関係の人間化」を目指したフルブライト教育交流計画の成果が試されているといって良いでしょう。

ところで、昨年アメリカの大統領選挙の際に、クリントン候補がアーカンソー州知事の経験者で、若いときにホワイト・ハウスを訪ね、ケネディ大統領に会ったことが、いつの日か自分も大統領になるという決意をさせたのだとの報道が随分となされました。しかし、フルブライターならば、アーカンソーといえばフルブライト上院議員の選出州であり、クリントンもフルブライトも同じ民主党所属であることに気がつくことと思います。この二人の間にどのようなつながりがあるのか、興味のあるところでした。

昨年秋、日本では「フルブライト教育交流計画」40周年を祝う行事が、天皇・皇后両陛下をお迎えして、横浜で盛大に挙行されました。今年の5月、こんどはワシントンで、フルブライト上院議員の88歳の誕生日を祝う行事がクリントン大統領をゲストに迎えて催されました。私の手元に、東京同窓会事務局のご好意により送られてきた当夜のプログラムと、この行事を伝えた「ワシントン・ポスト」の記事があります。これらによりますと、当夜クリントン大統領は「恩師」(my mentor)であるフルブライト上院議員に「大統領自由徽章」(Presidential Medal

of Freedom) を贈って教育の価値を常に支持し続けてきた功績を讃えました。

1968年、フルブライト上院議員が再選のためアーカンソーの田舎を遊説しているとき、自動車の運転手をしていたのが若き日のクリントンでした。時には二人で議論に熱中する余り、道を間違えたこともあったそうです。若き日のクリントンがフルブライト議員に魅せられたのは、彼がマッカーシーに反対し、しかも教育こそ人々を高め、国をも高めるものであることを確信させてくれたからだ。「ワシントン・ポスト」は伝えています。さらにクリントンはフルブライト上院議員のワシントンの事務所で「インターン」をした経験もあり、その意味でも、フルブライト上院議員はクリントン大統領にとって「恩師」にあたるわけです。

この式典の（日本流に言えば「米寿の祝い」ということになりますが、）主催者は「フルブライト・アソシエーション」です。名前には「同窓」という言葉は入ってはいませんが、この「アソシエーション」は1977年に設立されたアメリカ人の同窓生による組織で、いわば、私たちの同窓会のアメリカ版ということになります。推賛委員会の顔ぶれの中には、かつてのフルブライト上院議員の同僚だった人々（後に駐日大使となったマンズフィールド上院議員の名前もみえます）に混じって、フルブライト奨学生だった人々の名前も見え、その中には偶然ですがマンズフィールド大使の後任のアマコスト大使も入っています。もちろんのこと、日本のガリオア・フルブライト全国同窓会も後援者の中に加わっています。

さて、これは周知のこととは思いますが、アメリカの同窓会も日本の同窓会も、いわゆるヴォランティアによって構成されているわけです。同窓会の行事の運営は資金的には会費でまかなわれますが、会費ではまかないきれない部分については時間のある会員は時間を、ノウ・ハウを持っておられる会員はノウ・ハウを提供して頂き、あるいは会費以上に資金を提供できる方は資金の寄付をして頂くなど、ヴォランティア活動をして行くためにはヒト・モノ・カネの善意による提供が必要となりま

す。フルブライト教育交流の精神を生かし、また、われわれの受けてきた恩恵をわれわれの次の世代のために与えるためにも、同窓生のヴォランティア活動は必須です。中部の同窓会の更なる発展のために、ヴォランティア精神が一段と発揮されるようにと考えています。(1993/7/19記)

(中部同窓会会長、南山大学)

雑感

新しい世代の日米関係を築くために

藤原 由起子

昨今の報道を見聞して、今後の日米関係に一抹の不安を感じる人は多いと思う。現在、政治における55年体制の終焉に象徴されるように大きな世代交代の時期を迎えており、それに伴い日米関係も変化を始めることは確実なものにもかかわらず、明確な方向づけは未だされていないからである。よく言われるように日本人の対米観は戦後間もない時期に黄金時代のアメリカを経験した世代と、以後の高度成長期に生まれ育った世代のそれとは大きく異なる。次の世代はアメリカの良い面も問題点もありのままに認識し、もっと率直につきあえる関係を望んでいるのだと思う。

これから大きく変化を始める両国の関係を正しく導くのに有益なのは人物交流、特に若者の交流をより積極的に拡大することだと思われる。国と国との関係を支えるのは、結局個人と個人のつながりにほかならないからである。特に日本への受け入れを大幅に増大させ、今日の日本と日本人の本当の姿を一人でも多くのアメリカ人に知ってもらい、正しい相互理解に基づいて今後の日米関係を築く助けとしてもらいたいものである。また、アメリカ国内における日本研究を振興助成することも対日理解を深める上で有意義であろう。世代が変わり、その対米観が変わっても依然日本人にとって最も親密で重要な国はアメリカなのである。アメリカ政府が緊縮財政のなかでも自国への理解を促進すべく積極的に民間外交を行なっている点は大いに我々も見習うべきだと思う。

(1986年 国際交流職員プログラム)

報告

1. 総会記録

平成5年度の中部同窓会総会は、5月14日午後6時30分から名古屋アメリカン・センターの会議室で、会員約20名の出席をえて開催された。

はじめに、副会長の挨拶とゲストの紹介があり、ついで総会議長に千田純一氏を選出して議事を進めた。議事の主な内容は以下の通りである。

1. 平成4年度事業報告の件：ガリオア・フルブライト中部同窓会10周年記念総会の開催（平成4年6月13日、キャッスル・プラザ）、フルブライト計画40周年記念大会への参加（平成4年9月18日、横浜）などについての報告があった。

2. 平成4年度（平成4年4月—平成5年3月）決算報告ならびに監査報告の件：別記の通り承認された。

3. ガリオア・フルブライト40周年記念冠募金報告ならびに今後の対応についての件：G/F計画40周年を記念し、中部同窓会の独自の企画として米国から毎年1人の留学生を当地域に招請する（さしあたり4年間）ことを計画し、個人、法人から寄付を募ることとし、平成3年12月より募金活動を開始した。（目標額2,000万円）

このうち個人募金については、各会員から目標額（200万円）を上回る約220万円の寄付が寄せられたが、法人を対象とする募金は、堀江昭・前副会長のご努力にもかかわらず景気動向の影響を受けて中経連等との交渉が難航し、ついに不成立となった。

以上のような経過報告があり、これを承認した。

ついで、中部同窓会会員の厚意を無にしないためにも、個人募金約220万円は財団法人日米教育交流振興財団に委託し、同財団が全国レベルで行っている一億円募金の一助として有効活用してもらおうことにしたいとの提案があり、これを承認した。

4. 会則改訂の件：中部同窓会会則第5条第2項の「準会員」の規程に「もしくは本会の趣旨に賛同する者」との語句を追加することを承認した。

ついで、辻正次氏（名古屋市立大学）を準会員にお迎えし、中部同窓会の活動にご協力をいただくことを承認した。

なお、会則について全体を見直す時期に来ているのではないかとの発言があった。

5. 新役員選出および紹介の件：別記の通り、新役員の提案と紹介があり、承認された。

6. 名誉会員推薦の件：中部同窓会会則第5条第4項に基づき、当同窓会の活動にご尽力いただいた功績に報いるため、次の3氏を名誉会員に推薦したいとの提案があり、承認された。

初代会長 高仲 顕氏
第2代会長 長坂 源一郎氏
第3代会長 朝倉 幹夫氏

7. 平成5年度事業計画案の件：例会の開催、会員名簿の発行、Newsletterの発行等の計画につき説明があり、承認された。

8. 平成5年度予算案の件：別記の原案通り、承認された。

総会終了後、『もうひとつの日米関係—フルブライト教育交流の四十年—』の著者・近藤 健氏にゲスト・スピーチ（内容は本Newsletterに所収）をいただき、活発な質疑応答があった。引き続き懇親会に移り、ゲストを交えてビールを飲みながら歓談し、散会した。

2. 平成5年度の役員

会長： 岩野 一郎（1964年フルブライト、南山大学）

副会長： 千田 純一（1974年フルブライト、名古屋大学）
森島 昭夫（1966年フルブライト、名古屋大学）

幹事： 木下 宗七（1973年フルブライト、名古屋大学）
上田 慶一（1963年フルブライト、三重県教育文化会館）
大石 秀夫（1966年フルブライト、三菱自動車）
伊藤 陽一（1958年フルブライト、中京ユウ・コーポレーション）

監査： 篠田 啓一（1960年フルブライト、名古屋国際センター）

3. 平成4年度決算および 平成5年度予算案

平成4年度決算 (1992.4~1993.3)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	404,328		役員会諸費	11,160	弁当代他
金利収入	10,692		総会諸費	184,110	"
年会費・寄付	262,000	86名分	その他	49,580	郵便費等
総会会費	84,000	28名分	次期繰越	516,170	
合計	761,020		合計	761,020	

平成5年度予算 (1993.4~1994.3)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	516,170		総会諸費	65,000	弁当代他
金利収入	7,599		例会諸費	95,000	"
年会費	240,000	80名分	名簿作成費	70,000	200部
総会・例会会費	90,000	60名分	Newsletter	60,000	150部
			予備費	563,769	
合計	853,769		合計	853,769	

ゲスト・スピーチ

書けなかった、書けなかった もうひとつの日米関係

近藤 健

アメリカ人は、スピーチはまずジョークで始めるといい、日本人は弁解（アポロジ）から始めるといわれます。私は日本人なので、余り感心した習慣とは言えないのですが、やはり弁解から始めることにいたします。

今、皆さんのお手元にある拙著『もうひとつの日米関係』ですが、すでに読んでいただいた方もおられるかもしれませんが、皆さんのご批判に耐えられるか、全く自信がありません。昨年（1992年）9月に横浜で開かれた日米フルブライト計画40周年記念大会までに本を出す、という時間的制約がありました関係上、十二分に調べ尽くして書いたとは、到底言えないのであります。お恥ずかしい次第、と言わざるを得ません。

ここまでが弁解でございます。

恥ずかしながらとはいえ、様々な制約のなかで、それなりに努力は致しました。そして、これまでのところ日本語で書かれたフルブライト計画についてのまとまった本がなかったこともあり、拙著が日米フルブライト計画に関する当面の"standard reference"になるのではないかとの、いささかの自負もございます。

ここまでは自惚れであります。

ところで、今日、私に与えられた「書けなかったこと、書けなかったこと」という課題は、ここにおられる岩野先生の発案でございまして、まことにうまい課題を考えたものと感心しております。この課題は、日米フルブライト計画には何か微妙なあるいはスキャンダラスな事柄があって、書

けなかったのではないかの期待を抱かせます。それが期待外れであることはすぐお分かりになりますが、一方、この題は、いかようにもとれますから、何を話してもよいという便利さがあります。というわけで、この題を借りて、自分勝手なお話をさせていただこうと思います。

さて、「書けなかったこと」「書かなかったこと」であります。なぜそうなったかの理由は、二つに大別されると思います。その一つは、ちゃんと調べて事実を知っていながら、何らかの事情で「書けなかった」あるいは「書かなかった」ものであります。もう一つは、調査、取材が不十分のために「書かなかった」のではなく、文字どおり「書けなかった」ものであります。私の場合は、率直に言って、後者の「書けなかった」の方が多いことをここで白状いたします。

その中で、調査、取材が最も不足であったために書けなかったことは、「アメリカ人フルブライト」のことで、日本に滞在中のフルブライト10数人とインタビューは致しましたが、どうもピンとこない。ご承知のように、現在のアメリカ人フルブライトのほとんどは日本研究を専門にしている学者か、あるいは学者の卵です。本の中にも引用しましたが、カンザス・シティ・スター紙のクランプリー記者のような日本研究専門家ではないジャーナリストもいましたが、ほとんどが日本専門家で、それだけに日本は二度目、三度目の人が多い。アメリカ人のフルブライト経験というものがその人間の人生にどのような影響を与えたかを知るには、むしろ日本専門家でないほうがよい。従って、その人たちの意見や体験を知るには、アメリカに行ってそういう人を探し出して、インタビューしなければならない。しかし、まず、先立つものがない（お金）、そして時間がないなど、色々な物理的制約があってアメリカへの取材旅行は実現しませんでした。

話は前後しますが、この本を書くことになったきっかけは、40周年に当たり、日米フルブライト計画について何か記録になるようなものが書け

ないか、というフルブライト委員会（日米教育委員会）事務局長のキャロライン・ヤンさんの発案でした。私にどうかと誘われたのですが、なぜ私に白羽の矢をたてたのか。つらつら考えますのに、どうも私が新聞記者出身で締め切りになれているから40周年の記念大会に間に合わせて書かろうということが、主な理由ではないかと勘ぐっています。当初は、日米フルブライト計画40年を鳥瞰する、どちらかといえば本社創立何十周年記念の社史的なものをイメージしておられたようです。そして、日英両文で出版するアイデアでした。

私は引き受けるかどうか色々考えましたが、私は新聞記者時代から日米関係に関心を抱き続けてきたこと、特にその文化面に関心があったことから、この機会にやってみようと思ったわけです。そして、引き受ける以上は、私も学問の世界の端くれに座を占めている人間であるからには、単なる社史的な当たりさわりのないものにはしたくない、大袈裟に言えば、後世の批判に耐えうるようなもの、つまり、まともな記録にしよう、ということを出発いたしました。つまり、あくまで私の考えで書いたものであります。

また、取材費、調査費などの金銭的な支援は、どこからもいただいていることも、お断りしておきます。ただし、資料集め、内部資料の利用などには、ヤンさんをはじめ事務局の皆さんに大変お世話になりました。事務局のそうした支援がなければ、短期間にこのような本は書けなかったでしょう。ついでに申し添えますと、この本の印税は交流財団に寄付させていただきました。

というわけで、アメリカまで出かけて、アメリカの「フルブライト同窓会」を通じて調査することが出来なかった。これは残念であり、「アメリカのフルブライト」についてはほとんど「書けなかった」わけです。

拙著では、「日本を知る」という箇所、わずか6ページ（173-178ページ）書いただけです。これは、委員会事務局に保存してあるアメリカン・フルブライトの報告書を読んでまとめたものです。これが、私にとって

一番「書けなかった」ことであり、「書かなければいけなかった」ことです。ご承知のとおり、フルブライト計画の特徴あるいは価値の一つが互恵性 (mutuality) あるいは双方交通性—文字どおりの「交流」にあるとすれば、日本にやってきたアメリカン・フルブライターの経験を知らなければ、バランスを欠くわけであります。

ところで、こんな反省あるいは弁解がましいことではなく、「知っていた書けなかったこと、書けなかったこともあるであろう」とお疑いの方、あるいは「書くべきことを書いていない」とのご批判もあると思います。

このジャンルでいえば、二つあります。

ひとつは、同窓会活動であります。本のなかでは、同窓会結成の経緯、募金運動のことなどには触れておりますが、各地の同窓会の地道な交流活動には言及していません。実は、ある方から40周年という記念だし、同窓会が主体で記念大会を行なうのだから、もっと同窓会のことを書き入れてくれないか、とのご注文もいただきました。しかし私としましては、前に申しましたとおり、自画自賛的な社史的なものにしたくなかったので、私の意図を説明し、お断り申し上げたわけです。

もうひとつは事務局のことです。事務局については、その仕事に対する称賛と感謝とともに、批判、苦情もあり、今後のフルブライト計画運営にかかわる問題もあります。南山大学の岩野先生は、アメリカン・フルブライター受け入れに長らく携わって来られて、この辺の事情は私よりもよくご存じではないかと思えます。

この事務局の構成、運営、機能に関する問題は、結局は日本の留学生受け入れ体制、文化交流政策の問題に突き当たることではないでしょうか。

例えば、日本に国際交流あるいは国際教育交流の専門家 (プロフェSSIONAL) が果たしているのか、専門家を育成しようとしているか、そして、いたとしてもその地位はどうか、専門職としての市民権を認められている

のか。

外務省で、文化交流担当は主流ではなく、出世の終わりを意味していて、意欲のある人が担当にならないのではないかと、という疑問もあります。アメリカやイギリス、ドイツと比べて日本の文化交流政策、教育交流政策はどうなっているかなど、これはかなり重要な問題で、フルブライト計画とも関連します。本来なら、この問題に少なくとも一章を割くべきだったのかもしれませんが。それが出来なかったのは私の勉強不足、怠け心につきま

す。このことに関連して、この本を書きながら考えさせられた事がありました。ひとつは、日本人、というよりも日本の大学生といったほうが正確と思いますが、大学において留学生は単なる一風景と化してしまっているのではないかという懸念です。留学生と積極的に交わろうとしない、面倒を見ようとはしない。これは、一面では、悪いことではないかも知れません。外国人留学生を外国人だからといって変に意識しなくなったことは、留学が大衆化して、留学生交流が珍しい特別の事ではなくなったことの反映ともいえましよう。しかし、そのため、外国人留学生が疎外されて、日本留学の経験が偏ったものになったりするのではないかという懸念が生まれます。

この背後には、若い世代の間に広がっていると推測できる、そこはかたないナショナリズム、でなければ、排他的心情があるのではないのでしょうか。

日米間でしばしば行なわれている対日感情・対米感情に関する世論調査があります。ご承知かとも思いますが、どの調査にも共通して現れている事実があります。それは、両国の若い世代を比較した場合、日本の方はアメリカに対していわゆる嫌米・侮米的感情が強く、アメリカの若者はむしろ年長の世代よりも、日本に好意的感情をもっている、という結果であります。アメリカを批判的に見る眼をもつことはまことに良いことですし、アメリカ一辺倒では困ります。また、ジェネレーション・ギャップは、ど

の国にも、いつの世にもあります。しかし、日本の若い世代にarroganceが、傲慢さが生まれていないか、いささか心配です。それが留学生に対する態度にも現れていないか、と思うわけです。

このナショナリズムに裏打ちされたarroganceは、日本政府の姿勢にも現れているのではないかと懸念します。「フルブライト計画の使命は終わった」との声が、政府の担当部門から聞こえてきます。国際交流基金があるからいいのではないか、日本は日本の政府の金でやるからそれでいいのではないか、という発想からかも知れません。本のなかでも触れましたが、交流のルートは多様・多層のほうがいい。そして、フルブライト計画運営の特徴のひとつである運営のbi-nationalismは互恵的な国際交流のあるべき姿として、今後も生かすべきだと思っています。

一方、新しい時代に向けて人物交流計画を発展させようとの考えから、フルブライト計画のアジア版をという声があります。大いに結構であります。ただ、本のなかでも触れましたように、この場合、日本に招くだけではなく、日本から出かけていく双方交通の交流でなければフルブライトの精神に反します。またアジア志向が、嫌米・反米・侮米の裏返しでは困ります。アメリカ研究に多少とも従事しているものとして、アメリカかアジアかという、either/orの考え方に傾くことに危険を感じます。

話を日米に戻しまして、このところ、所謂「日本たたき」が話題になって来ました。その先鋒は、リヴィジョニスト（修正主義者）と呼ばれる日本研究者たちですが、その言い分や分析はわれわれにとって理不尽な側面も多々あります。しかし見方を変えたと、リヴィジョニストの出現は、フルブライト計画をはじめとする日米交流の成果のひとつであるとも言えるのではないのでしょうか。つまり、それだけ日本のことを真剣に考えているアメリカ人が増えた事の証明、というわけです。あるアメリカの学者は、リヴィジョニストなどによる「日本たたき」は、日米交流に対する"back-

handed compliment"（皮肉なお世辞）であるといっていました。

こうした日米交流とくに日米教育交流の先鞭をつけ、そのモデルとなったフルブライト計画の意義と業績は計り知れないものがあると思います。その日米フルブライト計画も40年経ちました。一世代であります。従って「転機」を迎えている事は間違いありません。同窓会にも、ジェネレーション・ギャップが存在していることは、ご承知のとおりであります。今後、フルブライト計画がどう進められるか、同窓会がどう支援をしていくかは、単に資金の問題ではなく、日米関係、日本の国際交流の哲学にも及ぶ事柄だと愚考します。

フルブライト計画の内容や態様は、今後とも時代の状況に応じて変化していくかもしれません。しかし、人物交流を通じて「国際関係の人間化」を希求したフルブライト計画の精神は、万国共通、普遍の理念だと思えます。

この精神に則って、日本と諸外国との人物交流、特に日米間の交流が、目先の利益や感情にとらわれずに多様に展開されることが、これからの国際秩序維持に不可欠ではないかと、この本を書いて思うことであります。

まともでない話を忍耐強くお聞きくださり、まことに有難うございました。

（中部同窓会総会、1993年5月14日）

ゲスト紹介：近藤 健氏は国際基督教大学教授。

国際コミュニケーション論、アメリカ研究専攻。著書に『もうひとつの日米関係—フルブライト教育交流の四十年—』、『アメリカを見る眼』など。ガリオア・フルブライト東京同窓会会員。

＜事務局だより＞

虫の音が一段と冴え、秋の風情豊かな季節となりました。久しぶりに皆さまにニューズレターをお届けできることをとても嬉しく思います。

当同窓会も10周年の区切りを迎え、2期ぶりの新体制でスタートしました。今年度はあらたに「準会員」というフレッシュな人材を迎え入れることとなりました。辻 正次氏は、ご自身はFulbrighterではないものの、ご夫人がアメリカ人でもあることから、日米親善活動のお手伝いをしたいというお申し出により、当同窓会の活動に加わって下さることになりました。ヴォランティア活動がなかなか根づかない日本で、何か役に立ちたいという気持ちがありながらどうしてよいか分からないことの多い日常にあっって、とても嬉しく、ありがたいことと感じました。

まもなく秋の例会が開催されます。追って皆さまのお手許にもご案内を差し上げることとなりますが、recent B.A. の Richterさん（下記参照）辻ご夫妻も加えた実り多い出会いの場となりますよう、会員の皆さまのご参加を心から願っております。

－ “Recent B.A.” の Gretchen L. Richterさんを迎えて －

去る9月の中旬に今年の“Recent B.A.” Program（日米教育委員会のプログラムの一つで、アメリカで学士（B.A.）を終わったばかりの若い人を日本に招き、一年間研究に従事してもらうもの）の奨学生 Gretchen L. Richterさんが名古屋に到着しました。Richterさんはメリーランド生まれで、ワシントン州のタコマにあるUniversity of Puget Soundを昨年5月に優等で卒業されました。学生時代の専攻はアジア研究と日本語で、卒業後ブラジルで日系ブラジル人についての研究に従事しました。今回の来日の目的は日系ブラジル人の「出稼ぎ労働者」の研究をしたいとのことで、名古屋大学教育学部の牧野研究室に籍をおき、活発に活動をされてい

ます。同窓会として、Richterさんの在名中にいろいろ出来る限りのお手伝いをしてさしあげたいと思っておりますが、ホームステイに招きたいなど、お申し出がおありの方は、直接Richterさんとコンタクトをお取り下さい。住所は次のとおりです。

〒464 名古屋市千種区鹿子町7-46 鹿の子エイト103号
Tel. 052-782-2677

－ 近藤 健氏の著書について －

先般5月の総会でゲスト・スピーチをして下さった近藤 健氏の著書『もうひとつの日米関係－フルブライト教育交流の四十年－』（ジャパン・タイムズ刊、1,800円）が若干部事務局にございます。ご希望の方には送料込みで1,500円にてお分けいたしますのでご連絡下さい。

－ 年会費の納入について －

当同窓会は、皆さまの会費によって運営されています。本年度分の会費納入がまだお済みでない方は、お送りした振込用紙をお使い頂くか、または下記の口座まで3,000円をご入金下さいますようお願い致します。

「名古屋1-56942 ガリオア・フルブライト中部同窓会」

－ 住所・勤務先等の変更について －

事務局では常時会員の皆さまからのご連絡をお待ちしています。会員名簿、ニューズレター等を皆さまのお手許に間違いなくお届けするためにも、名簿に記載されている事項に訂正、変更、追加等ございましたら、すみやかに事務局までお知らせ下さい。

編集後記

ガリオア・フルブライト中部同窓会のニュース・レター、第4号をお届けします。今号より編集世話人が交替いたします。第3号までご苦労された木下宗七氏に感謝申し上げます。

この間、中部同窓会10周年記念総会の開催、フルブライト計画40周年記念大会への参加など、ひとつの区切りになる、喜ばしい出来事がありました。他方、中部同窓会独自の留学生招請計画が不成功に終わるという残念な出来事もありました。本ニュース・レターが、こうした出来事の意味を考えるうえで多少とも参考になることを願い、今後とも原稿の執筆などご協力くださいますようお願いいたします。

(編集世話人 千田純一)

発行年月日 1993年10月18日
発行者 ガリオア・フルブライト中部同窓会
〒468 名古屋市昭和区山里町18
南山大学アメリカ研究センター内
電話 052-832-3111 (内線567)